

ジュニアゴルファーに関する意識調査

A survey about Junior golfers

1K08B080-8

小松原 大

指導教員 主査 間野義之 先生

副査 木村和彦 先生

【目的】

2011 年社会生活基本調査によると日本におけるゴルフ人口は1996年では1537万人だが、2011年では924万人である。依然として続いているゴルフ人口の減少を食い止めなければ、将来的に日本のゴルフの人口・レベル共に低下してしまう。なかでも10～14歳が208万人、15～19歳の151万人と、年代別ゴルフ人口の中で最も数少ない人口である。過去10年間で10～14歳、15～19歳ではゴルフ人口は共に減少している。

本研究の目的はこれからの日本のゴルフ界を支えるジュニア世代に意識調査を行い、ジュニア世代の意識をアンケートという結果にし、20歳以上との違いを明らかにすることである。

【方法】

本研究では東京都高等学校ゴルフ予選会（2012年10月2日大宮国際カントリークラブ）と、都内の中学校のゴルフ部にてアンケート調査を実施した。

ゴルフ市場活性化委員会（GMAC）と、BRIDGESTONEの2011年版現代ゴルファーのライフスタイル調査のデータに基づき、アンケート項目を作成、比較できるようにした。

本研究では、ゴルフ市場活性化委員会とBRIDGESTONEの調査結果と同様のアンケート調査を行い、比較・考察していく。

【結果】

ゴルフを始める時期が早ければ早いほど、平均スコアが縮まり、ゴルフも続けることができる。特に小学校4～5年生の時期にゴルフに触れ、中学校入学前にゴルフを始めることでゴルフにのめり込んでいって、ゴルフ歴が長くなる。

15歳という年齢を境目にして、ゴルフに対して趣味という認識が増える。そして、ジュニア世代には競技ゴルフへの意欲を高めさせるためには年間30ラウンド以上のヘビーゴルファーへと持っていかなければならない。競技力向上という観点では、15歳という年齢は1つのターニングポイントである。

ジュニアゴルファーは成人してからもゴルフを継続した際に、年間10ラウンドを持続していれば、ゴルフが単なる趣味ではなく“1番好きな趣味”になる可能性が高い。

社会人より、ジュニア世代の方がゴルフを安定して継続してくれる。つまり、ジュニアの時期にゴルフに触れさせることによって生涯を通して楽しめるスポーツに成る可能性が高い。ジュニア世代にゴルフを広めるということは、楽し

さを伝える面でも重要である。

【考察】

本研究の意識調査からこれからの日本ゴルフ界がジュニア世代にするべきことを順番に記述する。

1 ゴルフをカッコいいと思うこと→2 身の回りに何でもいいのでゴルフと接することができる環境があること→3 家族がゴルフをプレーすることに肯定的である→4 練習場でボールを打ってみる→5 ゴルフ場に行ってラウンドをする→6 継続する→7.1 ジュニアが1年間に10ラウンドできるような政策を行う。7.2 競技力に重点を置くのであれば、特に15歳までに重点的にアプローチする。彼らには年間で30ラウンド以上プレーできる環境が必要である。

1から6までスムーズに移行させることができれば、ジュニアゴルファーのゴルフ人口は増えていくだろう。この順番からは、実際にプレーするまで様々な障壁があることがゴルフというスポーツの課題であるということも分かる。

ゴルフは日本においてマイナースポーツである。しかし、ゴルフはメジャースポーツに成り得る競技でもある。

ゴルフをジュニアに触れさせることの重要性は高い。ジュニアゴルファー達の年齢でいうと中にはプロゴルファーに進む者も出てくるので、ジュニアゴルファーの指導者や親は、ジュニア本人への理解と協力が必要になってくる年齢である。ジュニアゴルファー達を人生の楽しみとしてのゴルフを続けさせる道筋を作ってあげるということも、日本のゴルフ界がこれからやらなければならないことの一つである。競技か、趣味か。どちらの選択肢も魅力的に見せるべきである。

筆者はゴルフに接する機会を増やしてほしいと思っている。ジュニア世代から人口減少を食い止め、底辺の拡大を行っていけば、ゴルフ人口も増加するはずである。そして、すぐゴルフをプレーできる状況がある、作ることこそがゴルフ人口拡大に繋がり、日本プロゴルフ界の競技力の向上にも繋がると思う。

ゴルフの1番の魅力は、広大な中でボールを遠くに打つという爽快感やコースという自然と戦うスポーツである。相手を思いやりながらプレーするというスポーツでもある。やってみなければ分からないゴルフの魅力が、本研究をきっかけにして少しでも多くの方に伝われば幸いである。